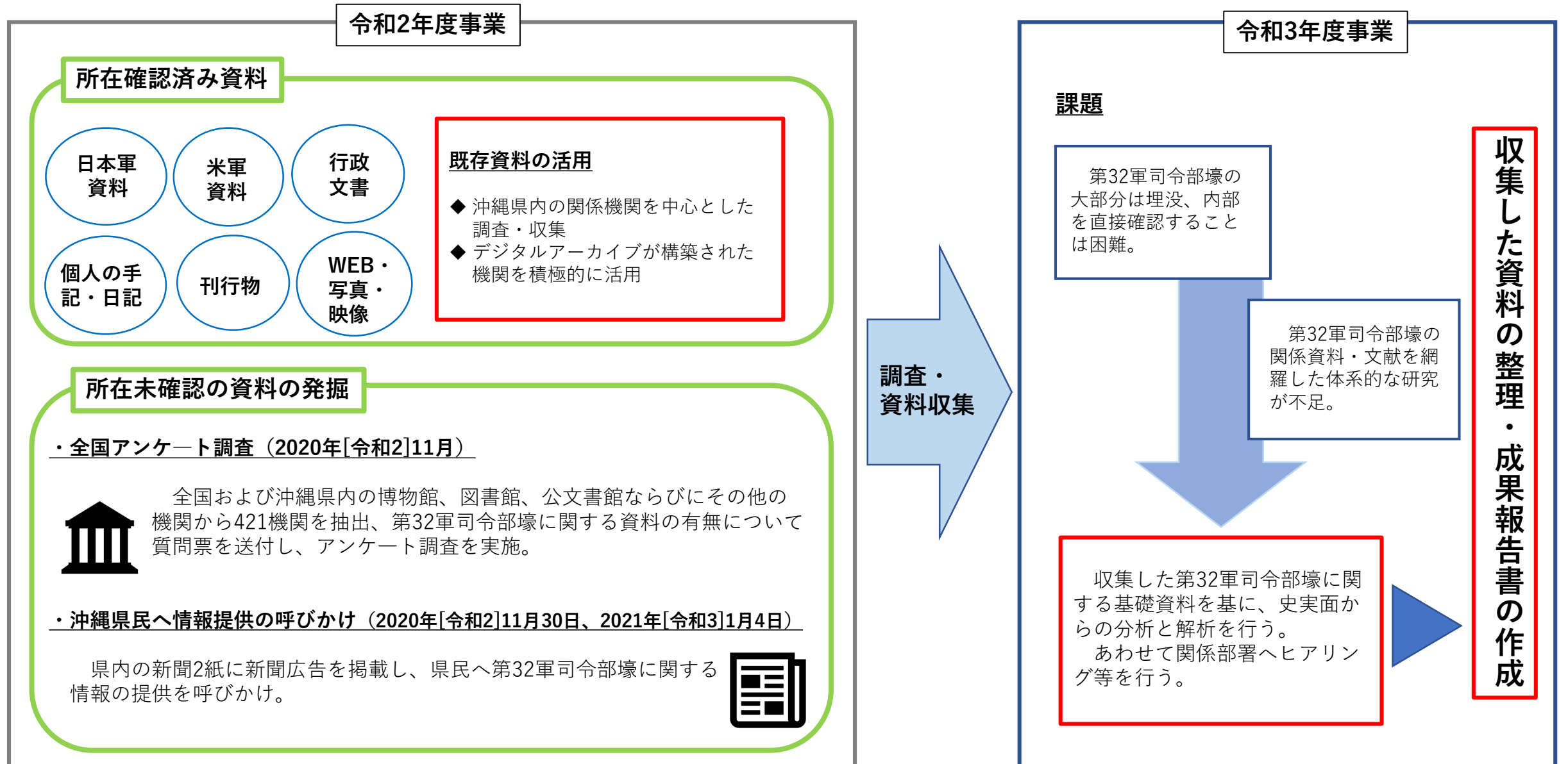


第5回 第32軍司令部壕保存・公開検討委員会
文献調査最終報告

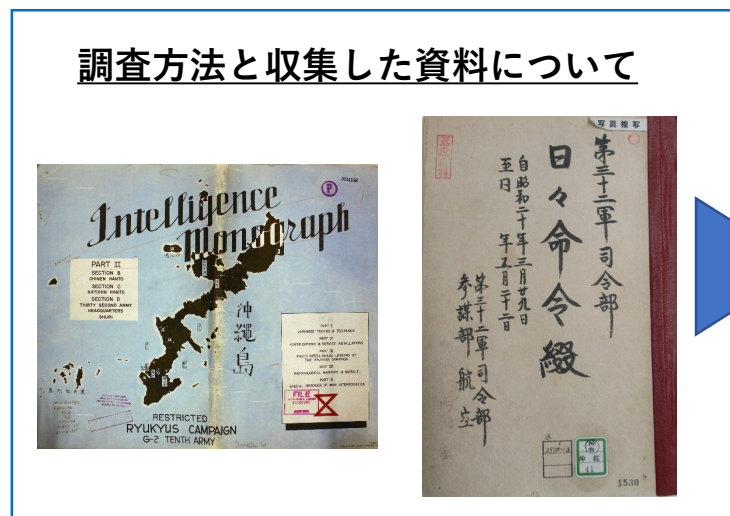
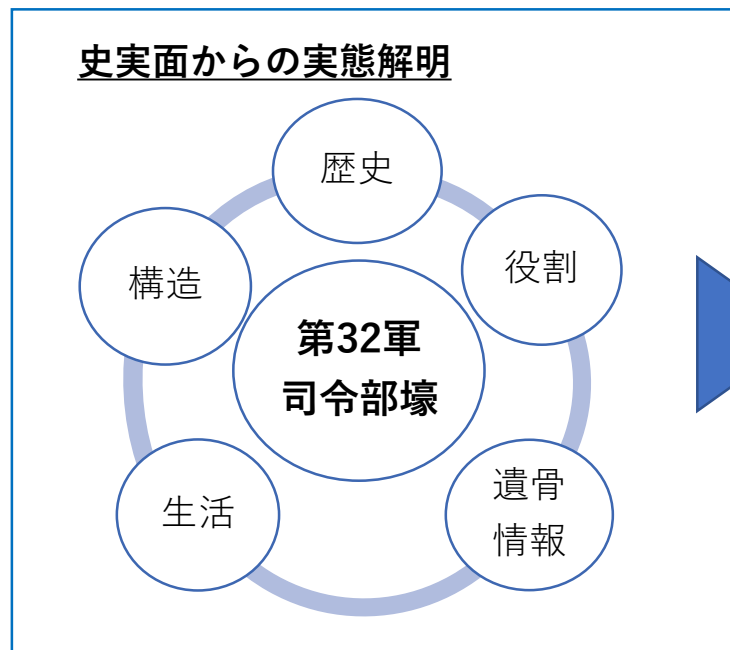
令和4年3月28日
公益財団法人 沖縄県文化振興会

1. 本委託業務の目的

沖縄戦の実相を次世代に伝えるために、極めて重要な歴史的戦跡である第32軍司令部壕に関する文献等資料を収集し、それらの分析を通して第32軍司令部壕の予察的な検討と実態把握に努める。



2. 第32軍司令部壕実態調査等業務報告書 概要



テーマ	報告書の章立て
歴史	第2章 第32軍司令部壕の保存・活用に向けた調査の歴史 第5章 第32軍司令部壕の構築
構造	第3章 第32軍司令部壕の構造
役割	第4章 第32軍司令部の編制とその任務
生活	第6章 第32軍司令部壕内部の活動状況
遺骨情報	第7章 第32軍司令部壕内の遺骨調査

調査の方法	第1章 調査の範囲と手法
重要資料	<ul style="list-style-type: none"> 『インテリジェンス・モノグラフ』 第10軍G-2作成『インテリジェンス・モノグラフ』の画像データ 『第32軍司令部 日々命令綴』 第32軍司令部作成『日々命令綴』の全文翻刻、要図・増強図6枚 『留守名簿』 『留守名簿』（国立公文書館所蔵2冊、沖縄県公文書館所蔵1冊）の解説／ 第32軍司令部の人員数とその内訳
文献目録	第32軍司令部壕の関係資料・文献のビブリオグラフィー（書誌目録）

3. 第32軍司令部壕の実態

歴史 ①第32軍司令部壕の保存・活用に向けた調査の歴史

これまでに行われた第32軍司令部壕調査

期 間	調査実施主体	報告書名・作成年	調査結果	備考
1945年（昭和20）6月～7月	米軍	『インテリジェンス・モノグラフ』1945年8月	壕内の坑道およそ7割を調査。（『インテリジェンス・モノグラフ』の計測値から計算）	<ul style="list-style-type: none"> 計測値が記されている。 壕内の写真と図表あり。
1958年（昭和33）7月19日、8月1日	沖縄観光協会、琉球政府	不明	不明	<ul style="list-style-type: none"> 元第32軍高級参謀の八原博通が描いた「首里軍司令部壕記憶図」を基に調査したとされる。
1962年（昭和37）11月5日	沖縄観光協会、那覇市	不明	不明	<ul style="list-style-type: none"> 琉球大学の職員や生存者への聞き取りを行い、第32軍司令部壕の位置について調査。 元第32軍高級参謀の八原博通が描いた「首里軍司令部壕記憶図」を基に調査したとされる。
1963年（昭和38）5月22日	沖縄観光協会、那覇市	不明	不明	
1965年（昭和40）1月12日、1月16日、5月～6月	那覇市、琉球政府	不明	不明	<ul style="list-style-type: none"> 生存者の立ち合いで、軍司令部壕の位置を確認したとされる。
1968年（昭和43）4月27日～6月30日	沖縄観光開発事業団	『首里軍司令部壕開発調査報告書』1968年6月	<ul style="list-style-type: none"> 第1坑口から壕内へ進入、坑道20mを調査。 第5坑道50mを調査。 旧琉球大学女子寮敷地内にあった縦坑（シャフトB）からも進入を試みたが、途中で断念。 	<ul style="list-style-type: none"> 元第32軍高級参謀の八原博通が描いた「首里軍司令部壕記憶図」を基に調査したとされる。 進入した坑口について現在の坑口位置情報と一致しない。 写真と図を掲載。
1994年（平成6）2月22日～4月25日	沖縄県、那覇市	『沖縄県・那覇市 旧第32軍司令部壕試掘調査業務委託報告書』平成6年4月	<ul style="list-style-type: none"> 壕内のおよそ300mを発掘。 第5坑道150mは、ほぼ完全な形で残っていることを確認。 第3坑道が守礼門の真下にあることが判明。 『インテリジェンス・モノグラフ』に記載されていたエンジニア・トンネルを確認。 壕中央部が崩落していることを確認。 	<ul style="list-style-type: none"> この調査から、『インテリジェンス・モノグラフ』が参考資料となる。 詳細な計測値、壕内の写真、図表あり。
1994年（平成6）8月11日～1995年（平成7）1月15日	沖縄県	『沖縄県 旧第32軍司令部壕試掘調査業務報告書』平成7年1月		
1995年（平成7）1月20日～3月31日	沖縄県	『沖縄県 旧第32軍司令部壕試掘調査業務（Ⅱ期）報告書』平成7年3月		

戦後の第 32 軍司令部壕内未調査箇所（『インテリジェンス・モノグラフ』掲載の写真で示した）

② 1994～95年（平成6～7）沖縄県の試掘調査

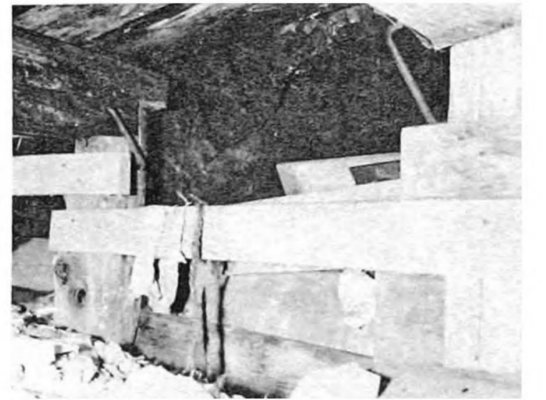
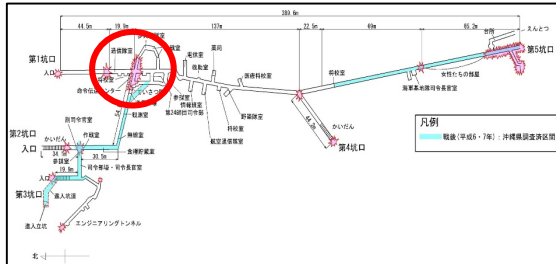


Figure29
爆破された箇所。第1坑口へ続く。

Figure26
第32軍情報室と第24師団作戦室

Figure27
第32軍情報室の壁面背後から、多数の書類が発見された。

Figure25
爆破箇所だが通行可能。シャフトA底部より撮影。
この先は第24師団長室へ続く。

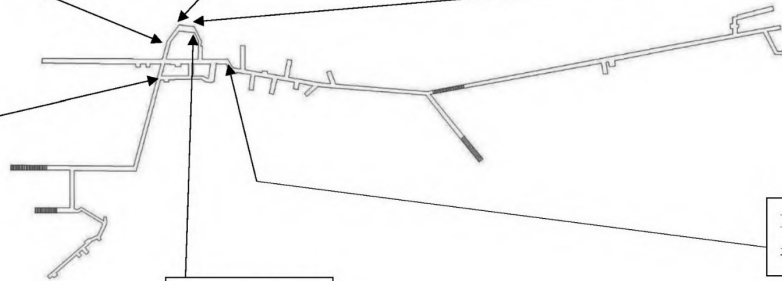
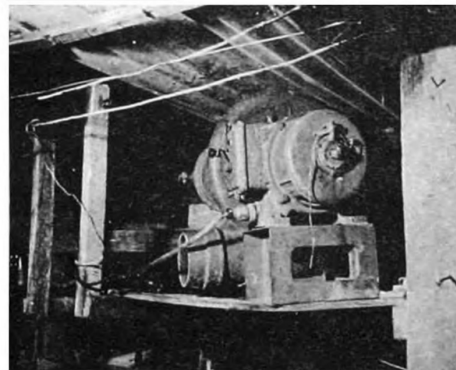
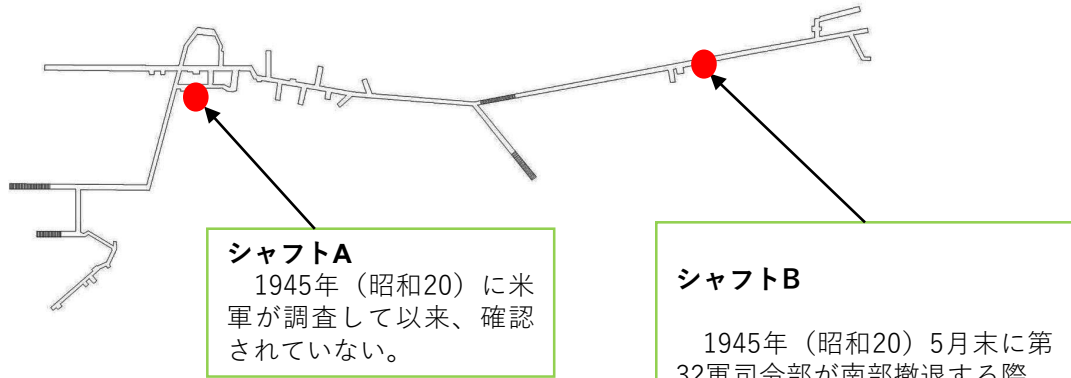


Figure30
壕中央部分の坑道内

Figure28 送風機



戦後の第32軍司令部壕内未調査箇所 シャフトA (『インテリジェンス・モノグラフ』掲載の写真で示した)



シャフトA
1945年(昭和20)に米軍が調査して以来、確認されていない。

シャフトB
1945年(昭和20)5月末に第32軍司令部が南部撤退する際、爆破されたため、米軍も未調査である。

1968年(昭和43)の沖縄観光開発事業団が行った調査の際に掘削が試みられたが、途中断念した。以来、確認されていない。



Figure9
シャフトA
地上入口



Figure10
シャフトA
地上入口

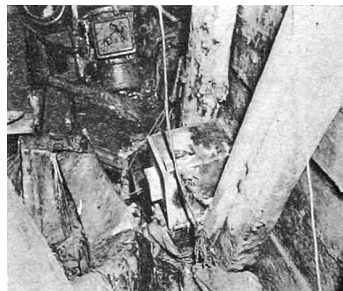


Figure14
シャフトA底部の
解除された爆発物

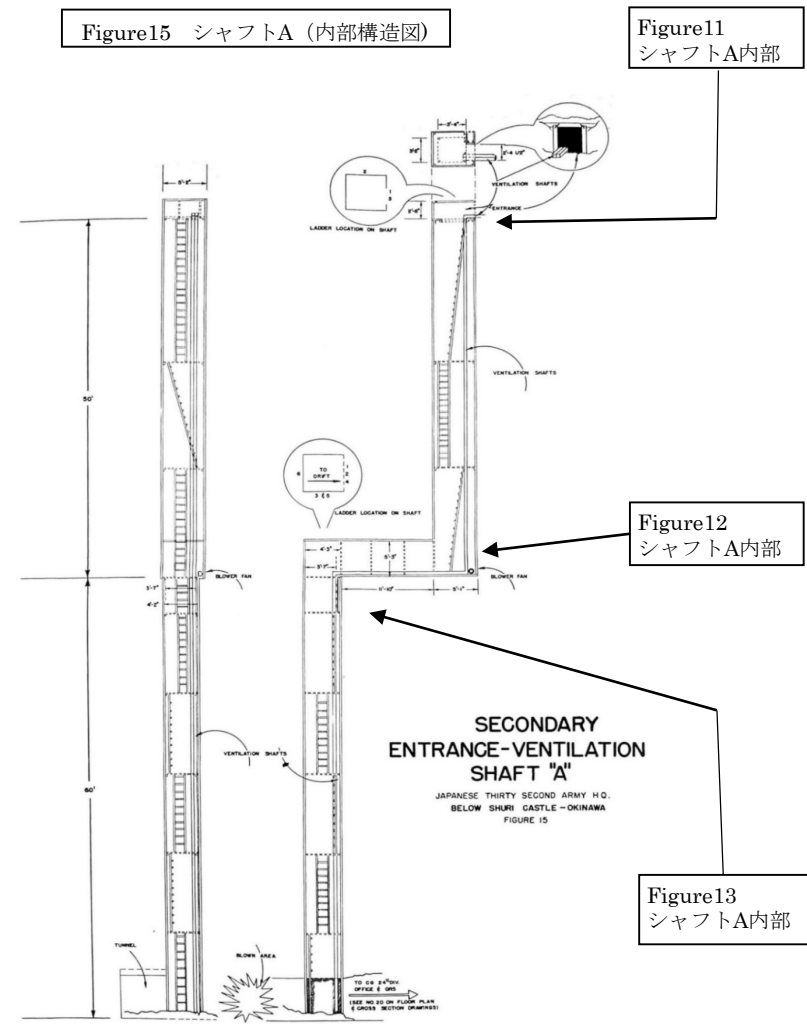


Figure15 シャフトA (内部構造図)

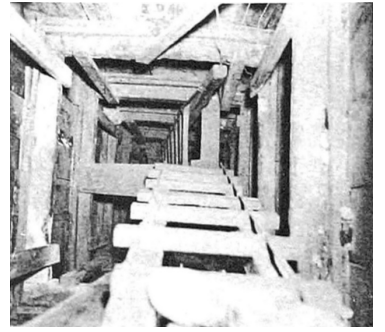


Figure11
シャフトA内部



Figure12
シャフトA内部

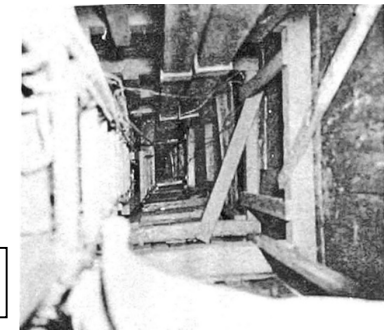


Figure13
シャフトA内部

役割

③第32軍司令部の編制とその任務

第32軍司令部編制と第32軍司令部壕に関する事項

1944年 (昭和19)	3月22日 大本営、第32軍を創設。 3月25日 第32軍司令部、福岡で編制開始。軍司令官に渡邊中将、参謀長に北川少将。
	7月7日 「絶対国防圏」の一角であるサイパンが陥落。 7月8日 長勇少将、第32軍参謀長に着任。 7月24日 大本営「陸海軍爾後ノ作戦指導大綱」（捷号作戦）を制定。
	8月10日 牛島満中将、第32軍司令官に着任。 8月19日、大本営、「島嶼守備要領」を制定。
	10月10日 米軍機による南西諸島空襲（10・10空襲）。 10月18日 大本営、捷一号作戦を発動。同日、「国軍決戦実施ノ要域ハ比島方面トス」と発令。
1945年 (昭和20)	12月3日 第32軍司令部、軍司令部の首里移転を決定。
	1月21日 第32軍司令部、参謀部、副官部、管理部を首里の沖縄師範学校の校舎に移転。 3月23日 米軍、南西諸島全域を空襲。

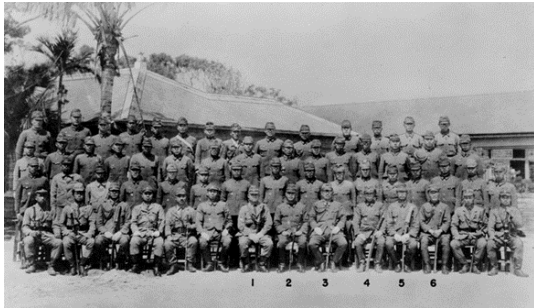
編制当日の第32軍司令部は、兵員・軍属あわせて270人で構成された。
出典：『第32軍編制人員表（沖縄）』（中央-軍事行政編制-45）防衛省防衛研究所所蔵を基に計算。

第32軍に地上部隊の編入が進められ、組織の改編とともに軍司令部の人員が増員される。

12月9日 首里城地下で第32軍司令部壕の構築開始。

3月23日 第32軍司令部、首里城地下の第32軍司令部壕に入る。

第32軍の集合写真
(1945年2月撮影)



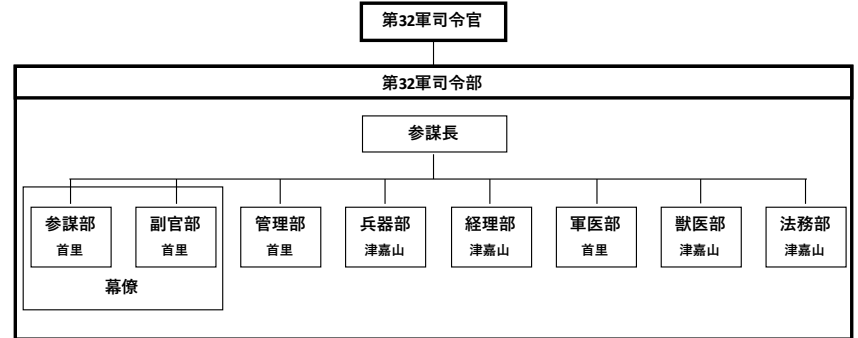
1. 大田実海軍中将
2. 牛島満第32軍司令官
3. 長勇第32軍参謀長
4. 金山均歩兵第89連隊長
5. 北郷格郎歩兵第32連隊長
6. 八原博通高級参謀

出典：沖縄県公文書館所蔵／資料コード:0000112245／写真番号：73-14-4

第32軍司令部の人員数について

- ▶ 『留守業務規程』の「記載要領」→ 定員1,520人、現員1,250人
(出典：『留守業務規程綴』（沖台-沖縄-258）防衛省防衛研究所戦史研究センター所蔵 [内閣府沖縄戦関係資料閲覧室 B03-4-107])
- ▶ 米軍押収資料 → 1945年（昭和20）2月28日現在の定員1,191人、実人数1,070人
(出典：『沖縄県史 資料編23 沖縄戦日本軍史料 沖縄戦6』[沖縄県教育委員会 2012年]p.834)
- ▶ 『第32軍編制人員表』 → 1945年（昭和20）5月25日の人員数が軍人1,344人、軍属等690人
(出典：『第32軍編制人員表（沖縄）』（中央-軍事行政編制-45）防衛省防衛研究所戦史研究センター所蔵 [アジア歴史資料センター C12121011400])

第32軍司令部編制表



出典：『戦時高等司令部勤務令 昭4.2.15』（中央-軍隊教育典範各令各種-61_2）防衛省防衛研究所戦史研究センター所蔵；「第三十二軍司令部編制改正要領」（昭和19年7月25日）『軍令綴 第11巻 目次番号（55～83）昭19.7.15～19.7.31』（中央-軍事行政軍令-11）防衛省防衛研究所戦史研究センター所蔵；南風原町史編集委員会『戦世の南風原 語るのこすつなぐ』（南風原町 2013年）を基に作成

軍司令部の任務

- 軍司令官… 天皇に直隷、軍を統率
- 参謀長… 司令官の補佐、軍幕僚（参謀部・副官部）の指揮監督、軍司令部一般業務の統制
- 参謀部… 作战計画に関する命令・通報、情報収集、諜報・宣伝に関する事項
- 副官部… 軍司令部に関する戦時名簿等に関する事項、陣中日誌の記載
- 管理部… 軍司令部の設備・警戒・その他の会計処理
- 兵器部… 弾薬の補給、兵器の整備・修理・交換
- 経理部… 軍需品、糧秣の調達、管理等、作战地域における地方物資と輸送力活用のための規定の作成
- 軍医部… 軍の保健、病疫、患者の収療、後送
- 獣医部… 軍馬の保健
- 法務部… 軍法会議の事務

出典：『戦時高等司令部勤務令 昭4.2.15』（中央-軍隊教育典範各令各種-61_2）防衛省防衛研究所戦史研究センター所蔵；『戦時高等司令部勤務令中改定の件御裁可の件（参本）』（昭和12年11月20日）『密大日記 第1冊 昭和12年』（陸軍省-密大日記-S12-1-11）防衛省防衛研究所戦史研究センター所蔵（アジア歴史資料センター C01007509000）を基に作成

④第32軍司令部壕の構築

当時の状況

1944年（昭和19）3月の第32軍の設立当初、積極的な飛行場建設が進められた。

その後、米軍の上陸が予想されるようになる。
▶ 航空作戦準備から、防衛体制の構築へと変更「全島要塞化」へ
海岸線や丘陵地にはトーチカ、内陸部には戦車壕や陣地壕などを備える作戦へ。

第32軍が設立されたのは、日本の軍事物資が欠乏していた時期

- セメント・鉄筋・鉄骨などの陣地構築のための材料の不足
- 部隊の主力も旧満州や中国本土からの移動、技術者も不足

各地で必要となる壕の構築のため、国頭で大量の木材が集められ、作業が行われている地域まで運搬または海上輸送が行われた。

第32軍司令部と軍司令部壕に関する出来事

1944年（昭和19）4月2日
安里の蚕種試験場に軍司令部の設置を決定。

1944年（昭和19）9月
南風原村津嘉山で、戦闘司令所の構築を開始。
読谷村石嶺久得で、軍予備戦闘司令所の構築を開始。

1944年（昭和19）10月10日
米軍機による南西諸島空襲（10・10空襲）

1944年（昭和19）11月
南風原村津嘉山の戦闘司令所の開設延期を決定。
読谷村石嶺久得の軍予備戦闘司令所の坑道作業を中止。

1944年（昭和19）12月3日
第32軍司令部、軍司令部の首里変更を決定。

1945年（昭和20）3月23日
米軍、南西諸島全域を空襲。

1944年（昭和19）10月3日
米軍統合参謀本部、アイスバーグ作戦（沖縄侵攻作戦）を発令。

1944年（昭和19）12月9日
首里城地下で軍司令部壕の構築を開始。

1945年（昭和20）3月23日
第32軍司令部、首里城地下の軍司令部壕に入る。

1945年（昭和20）5月
第32軍、南部撤退を決定。
5月27日、第32軍司令部壕を放棄、津嘉山を經由して摩文仁へ撤退。
5月31日、米軍、首里を占拠。

第32軍司令部壕の構築作業

第2野戦築城隊・・・1944年（昭和19）7月23日に岡山中部第52部隊において動員後、9月1日に那覇港に到着、9月2日には第32軍の指揮下に入った。12月9日から首里城地下の第32軍司令部壕の構築作業に従事。しかし、**設計等に関する資料は確認できない。**

1945年（昭和20）3月31日、第32軍司令部から鉄血勤皇隊編成の命令を受けた沖縄師範学校生の200名以上が、第2野戦築城隊に編入される。

構築作業や壕内についての証言が確認できる。

第32軍司令部壕の作業が終了し、完成したとされる日付や時期については資料を確認できず、証言も異なるため、不明。

証言にみる第32軍司令部壕の構築作業

1944年（昭和19）12月に始まった第32軍司令部壕の掘削作業は、兵士が削岩機や十字鍬で掘り、その土砂を学徒兵がすくって壕外に捨てるという人海戦術で行われた。

「坑木以外の資材は師団参謀部から支給を受けている。といっても掘削に最小限度の道具、つるはし、スコップ、もっこ、くらのものしかない」

出典：遠藤幸三『青年医学徒の沖縄戦回想記』p.48

「坑道内は天井などから流れ落ちた水で足首がつかれるほどだった。足はふやけるし、ずぶ濡れになるし、おまけに坑道内は蒸し暑く、兵隊もふんどし姿で作業していた」

出典：沖縄師範龍潭一八会『龍潭の畔で結んだ友情』p.149

「壕掘りも命がけだった。落盤事故があったり、掘り出した土石を外に運び出す作業など、砲爆下間髪を容れずトロッコを押して行くのだから容易なことではなかった」

出典：當銘由金編『龍潭同窓会編 傷魂を刻む（わが戦争体験記）』p.144

「兵隊が掘り出した土を私たちがトロッコに積み、ウインチ（巻き上げ機）で巻き上げて外に運び出すという作業だった」

出典：沖縄県与那原町史編集委員会編『与那原の沖縄戦 与那原町史戦時記録編』（沖縄県 与那原町教育委員会 2011年）p.201

「高さ二米余、幅四米程の坑道は松材を使って頑丈な柱を立て、天井も落盤を防ぐため厚い松板をはめる。処々に袋穴を作って部屋にし、また、換気のための垂直坑道も掘る。円鑑池南側第一坑道や首里第二国民学校からの坑道の入口が中で交わり、首里城下を貫通して金城町の下に出る地下壕掘り」

出典：當銘由金編『龍潭同窓会編 傷魂を刻む（わが戦争体験記）』p.146

「留魂壕（引用注、沖縄師範学校壕）から首里城正殿前を突っ切り、崩れた城壁を乗り越えて金城町への下り坂を駆けて作業場である軍司令部壕へたどり着くのであるが、遮蔽物のない首里城高台では今にも砲弾が来そうで生きた心地がしなかった」

出典：字経塚史編集委員会『字経塚史』（浦添市字経塚自治会 2006年）p.83

「クチャと呼ばれる土質もある程度掘り込んでいくと、中には腐りかかったような異臭を放つこともあった」

出典：沖縄師範龍潭一八会『龍潭の畔で結んだ友情』（沖縄師範龍潭一八会 2005年）p.120

生活 ⑤第32軍司令部壕内部の活動状況

壕内の生活環境

1945年（昭和20）3月下旬、首脳部は軍司令部壕の北側に位置していたようであるが、壕の北側の坑道と南側の坑道が開通したことに伴い、軍司令部の首脳部は壕の中央部に移転。しかし壕内は人員が充満しているため、空気の流通が悪く、気温は摂氏約30度、湿度は100パーセントに近く、「到底人間の長く住める場所」ではなかったとされる。第32軍司令部壕のなかでも作戦参謀が置かれた第1坑道奥の中央部が最も環境が悪く、「半月もすると軍首脳部はすっかり参って」しまったため、第32軍司令部壕の北側の第3坑道に移転したかたちとなった。移転の理由は、出口に近いこと、そして「比較的空気の流通がよい」ことであった。

参考：八原博通『沖縄決戦 高級参謀の手記』（読売新聞社 1972年）

衛生管理

第32軍司令部は、地下壕特有の生活環境に対応するため、いくつかの衛生対策を講じている。そのうちのひとつとして、第5坑道に濾過機を設置、生水の飲用を禁じている。濾過機の目的は他にも、冷水式ディーゼル発電機を稼働させるためのものであった。

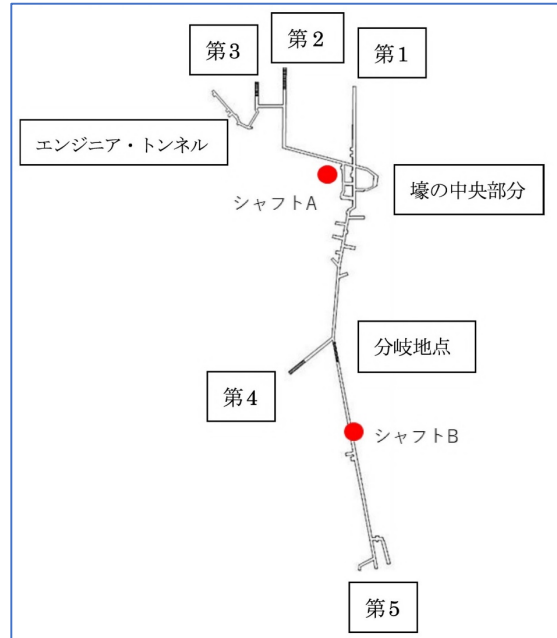
第4坑口、第5坑口の周辺に便所が設置されていたとみられる。便所の使用に関しては、階級による厳格な使用区分が適用されていた。第5坑道内の入浴場に関しても、部隊ごとに入浴区分や時間を調整するものとされていた。

坑口の偽装・防諜対策

米軍の砲撃の合間を見て、第32軍司令部壕の各坑口の偽装が絶えず求められていた。

また、第32軍司令部壕における警戒態勢は、米軍に対するカモフラージュとあわせ、第32軍司令部壕の内部の人員を対象とした、防諜対策としての性格を強く持っていた。壕内では、軍人であろうが軍属であろうが「標準語」以外の使用は禁じられ、「沖縄語」つまり沖縄方言を使用する者を間諜すなわちスパイとみなす、というものであった。第5坑口周辺で、スパイと見なされ殺害された女性についての証言がある。

第32軍司令部壕



第32軍司令部壕の司令官室（1945年撮影）



出典：「第32軍司令部壕の司令官室」沖縄県平和祈念資料館所蔵

女子雇傭人

1945年（昭和20）4月9日の要図に、壕の中央部分に「女雇傭人」が配置されているのが確認できる。

（出典：「壕内配置要図」〔昭和20年4月9日〕『司令部 日々命令 昭和20年3月～5月』（沖台-沖縄-41）防衛省防衛研究所戦史研究センター所蔵）

5月10日に第32軍司令部は「女子雇傭人」へ転属命令を発した。第24師団への転属命令を受けたのは、第一梯団の幕僚部・軍医部の筆生（書記）・打字手（タイピスト）の21人、第二梯団の管理部などの筆生・雑使の17人、第三梯団の「若藤及病院」の27人、第四梯団の偕行社の14人、その他34人の計113人。

（出典：「球日命第一〇七号」〔昭和20年5月10日〕『司令部 日々命令 昭和20年3月～5月』（沖台-沖縄-41）防衛省防衛研究所戦史研究センター所蔵）

南部撤退の意思決定

南部撤退の検討は、第3坑道の軍司令官室に隣接する参謀寝室で行われた。1945年（昭和20）5月21日の夜、参謀寝室では、第32軍司令部の全参謀、第62師団の参謀長・参謀、第24師団の参謀長・参謀、独立混成第44旅団の参謀などが召集され、①首里決戦案、②知念半島撤退案、③喜屋武半島撤退案の三案が検討された。第62師団は首里決戦を、第24師団と砲兵隊は喜屋武半島への撤退を、独立混成第44旅団は知念半島への撤退をそれぞれ主張した。

➡1945年（昭和20）5月22日、牛島軍司令官は喜屋武半島への撤退を決断。

遺骨情報 ⑥ 第32軍司令部壕内の遺骨調査

壕内の遺骨残存の可能性について

壕内の軍医部と患者収容室

→ 軍医部に関わる資料の現存が確認できない。米軍の『インテリジェンス・モノグラフ』にも、関連する情報の記載はない。

第32軍司令部の南部撤退時の状況

→ 負傷兵については、1945年（昭和20）5月末に第32軍司令部が南部へ撤退するにあたり、壕内にそのまま残されたとの証言もある。

戦闘中に負傷兵が存在しないということは考えられず、第32軍司令部壕内にも運び込まれていた可能性は高いものの、壕内に遺骨が残ってるかどうかは不明。

1945年（昭和20）12月、首里への住民の帰村、移動が始まる。先遣隊による街の復興とともに遺骨は収集され、那覇市首里の万松院に安置された。

その際、第32軍司令部壕内の遺骨が収集されたかは不明。

壕周辺での遺骨収集

遺骨収集 → 厚生労働省と沖縄県が役割を分担

（地表面の遺骨については沖縄県が収集、埋没壕等については厚生労働省が収集する。）

1986年（昭和61）～1987年（昭和62）厚生省による埋没壕等調査

▶ 調査対象の1つが「軍司令部壕」（所在地「那覇市首里当蔵町3丁目（旧琉大農学ビル東側）」、地目「史跡」、所有者「国有地」）

調査場所が第32軍司令部壕と一致せず、実際に調査が行われたのは第32軍司令部壕以外の場所であったと思われる。

2011年（平成23）11月28日、厚生労働省の遺骨収容調査

→ 第2坑道、第3坑道、第5坑道について「入坑可能な坑道では遺骨は発見されていない。」と報告。

戦後の遺骨収集事業

壕内の未調査箇所遺骨については存否不明のままである。

第32軍司令部壕調査と遺骨に関する情報

	調査期間	調査主体	遺骨に関する情報
1	1945年（昭和20）6月～7月	米軍	『インテリジェンス・モノグラフ』には遺骨について記載はない。
	1958年（昭和33）7月19日、8月1日	沖縄観光協会、琉球政府	不明
	1962年（昭和37）11月5日	沖縄観光協会、那覇市	不明
	1963年（昭和38）5月22日	沖縄観光協会、那覇市	不明
2	1965年（昭和40）1月12日、1月16日、5月～6月	那覇市、琉球政府	不明 ・1965年（昭和40）6月のポーリング調査で遺骨は出なかった（調査関係者への聴取）。 ・1965年（昭和40）の調査作業中に遺骨が数体見つかった（ボランティアで参加した元琉球政府職員の見聞）。 ・1965年（昭和40）前後に那覇市が行った調査で、貨物車2台分の遺骨が壕の入口で発見された（1992年（平成4）の新聞記事）。
3	1968年（昭和43）4月27日～6月30日	沖縄観光開発事業団	遺骨発見の報告はない。
<p>「那覇市首里当蔵町3丁目（旧琉大農学ビル東側）」の「軍司令部壕」調査 ・1986年（昭和61）12月8日～12日 厚生省による埋没壕等の実地調査（事前調査） ・1987年（昭和62）6月29日～7月28日 昭和62年度 沖縄戦没者遺骨収集 遺骨について「7/21調査するが発見出来ず」</p>			
4	1994年（平成6）2月22日～4月25日	那覇市、沖縄県	「遺骨の発見はなかった」と報告書にある。 なお、3回目の試掘調査（Ⅱ期）で、首里城公園地下駐車場の入口付近にあるトーチカからの掘削を試みた際、深さ16mのガマを発見し、内部に金物や遺骨等が残されているのが確認されたが、沖縄戦当時、第32軍司令部壕に隣接していた第5砲兵師団司令部壕に関する遺骨と思われる、とある。
	1994年（平成6）8月11日～	沖縄県	
	1995年（平成7）1月15日	沖縄県	
	1995年（平成7）1月20日～3月31日	沖縄県	

厚生労働省「平成23年度沖縄戦没者遺骨収容調査」

・2011年（平成23）11月28日 第2坑道、第3坑道、第5坑道に入坑し、調査。遺骨について「入坑可能な坑道で遺骨は発見されていない。」

※ 各委員のご了解を得て、一部修正しております。

4. おわりに

アジア・太平洋戦争末期において、1944年（昭和19）3月22日に創設された第32軍は、沖縄県首里市（当時）の首里城地下に巨大な司令部壕を構築した。米軍の艦砲射撃がはじまる1945年（昭和20）3月23日以降、第32軍司令部はこの地下壕で作戦指揮を執った。沖縄戦では戦闘員を上回る数の一般住民が亡くなったが、なかでも第32軍の「南部撤退」は、住民被害の拡大につながったこととして、沖縄県民に強く記憶されている。

第32軍司令部壕に関係する日米両軍の一次資料、戦後行政文書、刊行物、新聞記事、関係者の手記・日誌あるいは証言記録といった文献資料の分析を試みた本報告書が、第32軍司令部壕の実態解明に向けた一助として、また今後の調査・研究のための手がかりとなれば幸いである。